

佐世保市における軍港景観の 文化資源化

Changing a Military Port Landscape into Cultural Resources in Sasebo City

山本理佳

YAMAMOTO Rika

- ① 本論文の目的と枠組み
- ② 進行する軍港景観の文化資源化
- ③ 米軍施設の「返還」をめぐる実践者内のずれ
- ④ おわりに

【論文要旨】

本論文は、近年の日本で極めて広範な対象を文化資源化している「近代化遺産」をめぐる動きを明らかにすることを目的として、とくに軍事施設までもが文化資源化される現象を取り上げた。すなわち、軍事施設の機密性と文化遺産の公開性との根本的な対立にもかかわらず、いかにして軍事施設の「近代化遺産」化が進んでいるのかをとらえた。対象としたのは、米海軍や海上自衛隊の大規模な「軍港」を抱える長崎県佐世保市である。佐世保市では、それら「軍港」内の施設の多くが戦前期に旧海軍が構築した「歴史的」建造物であることから、それらを「近代化遺産」として活用しようとする動きが1990年代半ばから活発化している。

ここで明確にとらえられた点が、まず軍事施設の機密性が民間の開発などからの文化財の「保護」と結びつき、ことに軍を「優れた保存管理主体」として評価することにつながっている状況である。また、軍によって取り壊された煉瓦造建築物の廃材を活用した基地外での景観整備が近代化遺産の活用実践の主要な動きとなっている状況もとらえられた。いずれも軍の機密性に支障のない形で文化遺産化が進行していることが明らかとなったのみならず、「軍」を地域のアイデンティティとしてとらえる見方を醸成し、地域における軍存在の正当化につながっていることも明らかとなった。そして、そのような国家権力側に都合のよい「近代化遺産」化の動きは、地域内実践者の言説に垣間見える、軍事基地内の機密性と文化遺産活用との相容れなさへの実感と、それに伴う「返還」への強い執着との微妙なずれを生じつつも進行していた。総じて「近代化遺産」の貪欲な文化資源化の動きが浮き彫りとなった。

【キーワード】 近代化遺産、軍事基地、文化資源化、長崎県佐世保市